

子どもの目を通して見た日本とイギリス

—日英比較研究—

白 須 康 子

I. 序

平成14年度版の日本統計年鑑によると、イギリスに長期滞在または永住する日本人の数は55,224人（1999年）、日本に居住するイギリス人は16,525人（2000年）で、その数は20年ほど前に比べて前者は約10倍に、後者も3倍以上に増加している。また最新の観光白書によると、1980年代後半から海外旅行に出かける日本人の数が急激に増加し、2000年にイギリスを訪れた日本人は約56万人で、イギリスはヨーロッパの国々の中で5番目に日本人観光客に人気のある国である。その一方、2002年に日本を訪れたイギリス人は10年前の2倍にあたる約22万人で、外国人観光客の国別統計の中で韓国、台湾、アメリカ、中国、香港に次いで第6位となっている。

しかし、これらの数字が示しているもうひとつの現実は、日英両国の子どもたちがお互いの国の人々と日常的に直接交流する機会は極めて限られたものでしかないということである。インターネットの時代を迎え、グローバルな情報をいながらにして瞬時に入手することが可能になったとはいえ、日本とイギリスの間に物理的な距離の遠さ、東洋と西洋という全く異質の文化、それに加えて言語面でのバリアといった心理的な距離を感じさせるさまざまな要因が存在している。このように異質の文化圏に属す現代の日本とイギリスの子どもたちは相互の国や人々をどのようなイメージで

認識しているのだろうか。本稿ではこのテーマに基づいて、イギリスの中等教育機関で学ぶ約200名の生徒（12～18歳）と、日本の中学生・高校生約300名を対象に行ったアンケート調査の一部を分析する。

以下の構成は次の通りである。①まず、この研究のテーマに関連する主な先行研究を概観し、②次に、調査の方法論についてサンプルの構成と変数、アンケート冊子の作成方法、データ収集と分析のしかたを簡単に説明する。③調査結果の報告は日本に関するイメージとイギリスに関するイメージ、および情報源の3つの部分に分けて行う。④最後に、主な調査結果をまとめ結論を導く。

Ⅱ．先行研究の概観

Ⅱ-1．ステレオタイプとエスノセントリズム

ステレオタイプ（固定概念）という概念を初めて論じたのはLippmann (1922) である。彼はそれを「我々の頭の中にある絵」と表現し、ステレオタイプはその人の属す文化と切り離すことのできない関係にあること、集団間の相違点も類似点も誇張される傾向があること、またそれは非中立的で強い感情が作用するなどの特徴を指摘した。民族のステレオタイプの研究ではBrigham (1971) が、あるステレオタイプを他のいかなる普遍化とも区別するときの観察者の主観的な基準を強調して、“an ethnic stereotype is a generalization made about an ethnic group, concerning a trait attribution, which is considered to be unjustified by an observer” (p.31) と定義した。EaglyとKite (1987) は国民性のステレオタイプはその国のニュースとして取り上げられるようなイベントで主要な役割を果たす優勢な下位集団のステレオタイプに類似する傾向があり、従属的な下位集団は国内における彼らの社会的地位に関連した特性

で知覚されるとしている。

一方、エスノセントリズム（自民族中心主義）という概念の起源は Sumnar（1906）にさかのぼる。StephanとRosenfield（1982）は社会をさまざまな集団に類別化することが人種的・民族的ステレオタイプの原因のひとつであるとし、ステレオタイプの形成にはエスノセントリズムが重要な役割を果たしているという見方をしている。GudykunstとNishida（1994）はエスノセントリズムを“a bias toward the culture that causes individuals to evaluate different patterns of behavior negatively rather than trying to understand them”（p.90）と定義し、エスノセントリズムは文化相対主義と相関関係にあるため、個人のエスノセントリズムが高ければ高いほど、文化相対主義は低くなると指摘している。

II-2. 子どもにおける国という概念の発達と外国人の認識

子どもが国という概念を理解することができるようになるのは7歳前後であるが、国や国籍についての理解が十分に発達するのは10～11歳であることをつきとめたのはPiageとWeil（1951）である。

その後LambertとKlineberg（1967）は子どもが外国人をどのように認識しているかを調べるための大規模な国際調査を行い、それには日本を含む世界の11の国や地域に住む6歳、10歳、14歳の子ども3,300人が参加した。この調査で子どもが外国人についてステレオタイプの判断を下し始めるのは10歳前後で、その傾向は14歳のグループの子どもたちの間で最も顕著に見られることがわかった。そのほかに、10歳のグループの子どもたちが外国人に対して最も友好的な態度を示すこと、子どもの年齢が上がるにつれて単なる事実を述べることから評価を伴う叙述が相対的に多くなり、その内容も観察可能な特徴から性格上の特徴へと変化していくと報告している。

この調査にはイギリスの子どもは参加していないが、アメリカ、フランス

系カナダ、イギリス系カナダ、フランス、ドイツの子どもたちの回答のパターンがよく似ている。例えば、彼らが自国民について語る時に共通して見られる特徴が2つあり、そのひとつは年齢が上がるにつれて、身体的特徴に関する言及が次第に減少し、性格上の特性が相対的に重要さを増してくることだが、日本の子どもは14歳のグループでさえ身体的特徴についての言及が多い。もうひとつの共通点は、西洋の子どもたちは自国民の長所を強調することである。しかし、日本の子どもの場合は日本人を「頭がいい」と認めるものの、その他は否定的な形容詞が頻繁に使われている。

LambertとKlinebergはアメリカ・フランス・カナダの子どもたちを、彼らが似ているとみなす外国人にも似ていないとみなす外国人に対しても、比較的高い類似観と愛情を示す友好的なグループに分類し、逆に日本の子どもはブラジル・イスラエル・トルコの子どもたちとともに非友好的なグループに分類されている。

Lambertらは日本の子どもの回答パターンが他地域の子どものたちと違って独特であると述べている。日本の子どもは外国人を自国民に似ているとみなす傾向が極端に低く、他の国の人々に対する愛情指数の中で最も低い数値を示し、それは彼らが日本人に似ているとみなす国民に対してもそうである。しかし、日本の子どもはエスノセントリズムの数値が非常に低い。日本の子どもはブラジルの子どものと同様、外国人嫌いで狭い類似観を持つ、本質的に非友好的なパターンを示しているが、ブラジルの子どものはエスノセントリズムが高く、一貫したパターンを示しているのに対し、日本の子どもはエスノセントリズムが非常に低いとまとめている。

Ⅲ. 調査の方法

この研究のためのデータは調査票に自分で記入するアンケート調査によ

って、1993年11月から1994年4月にかけてイギリスと日本の12歳から18歳の子どもたちから収集された。この調査には日本の場合、北海道・本州・九州各地にある11の中学校と高等学校の生徒310名が、イギリスではイングランドとウェールズ地方にある12のセカンダリー・スクールに通う203名の生徒が参加した。いずれの場合も変数として性別と年齢（中学校レベルと高等学校レベル）のバランスを考慮したほか、イギリスの子どものみ日本語学習の変数を設け、学校における日本語学習者と非学習者の割合をほぼ半数ずつにそろえた。

調査に使われたアンケート用紙は、日本に関する冊子は英語で、イギリスについての冊子は日本語で用意された。各冊子は相手の国や人々に関する①クイズ形式の多肢選択型知識テスト、②5段階評価、③イメージを自分の言葉で表現する自由回答形式の質問、④情報源等についての質問で構成される。知識テストの作成にあたり、イギリス編では*British Social Attitudes Reports*、*Social Trends*、Fothergill and Vincent (1985)、Furnham and Gunter (1989)などを参考にした。日本編では、『青少年白書』、『世界の青年との比較からみた日本の青年：第5回世界青年意識調査報告書』、*The Japan of Today* (1989)、*Inside Japan* (1991)等を参照した。

アンケート用紙は各協力校に郵送され、先生方に依頼して調査票の記入は学校で授業中に集団で行われた。収集されたデータの分析は、①と④に関してはカテゴリーデータの単純集計を行った。②はSPSSによる統計処理がなされ、③はKJ法で分析された。本稿では③の自由回答によって得られた、日英両国の子どもたちがお互いの国や人々について抱いているイメージの分析を中心に、②の5段階評価と④の情報源についての結果を報告する。

IV. 日本とイギリスのイメージ比較

IV-1. イギリスの子どもが思い描く日本のイメージ

この章ではイギリスの子どもたちが自分の言葉で自由に表現した日本や日本人のイメージについてKJ法で分析した結果をまとめる。アンケート調査に参加した203名中、この質問には無回答だった生徒13名を除いた、残り190名の回答が分析の対象となったが、その内訳は男子77名（40.5%）、女子113名（59.5%）、16歳未満87名（45.8%）、16歳以上103名（54.2%）、日本語学習者93名（48.9%）、非日本語学習者97名（51.1%）である。男女比のみややアンバランスで女子が少し多い集団になっている。

「日本はどんな国だと思いますか。短い言葉で3つ書いてください」という質問に対して、男子の回答は65ユニット、女子は98ユニットあり、回答の延べ総数は615であった。男女別に頻度の高いユニットを比較してみると、上位10ユニットのうち8つが重複している。男女別に最も頻度の高い答えはともに1位が「混雑している」2位が「科学技術が発達している」で、3位以下は男女別に多少順位は異なるが、「近代的」「勤勉」「忙しい」「教養がある」「伝統的」「大都市」が続く。男女の回答を総合すると全部で118の異なるユニットになり、「お金持ち」と「工業化されている」が加わって上位10ユニットを構成する。

118のユニットはKJ法でまず59の小グループ（S）に分類された。2つの最も大きな小グループは上記の1位と2位がそのまま踏襲され、それらに続いて「S3：古い伝統のある国」、相撲や食べ物などを含む「S4：伝統的な日本の物」、「S5：勤勉」が小グループの主なものである。

59の小グループは次に34の中グループ（M）に再編成され、その結果いくつかの対立するイメージのパターンが浮かび上がってきた。国のイメージと人のイメージ、伝統的な日本のイメージと現代の日本のイメージ、プ

ラスのイメージとマイナスのイメージなどである。

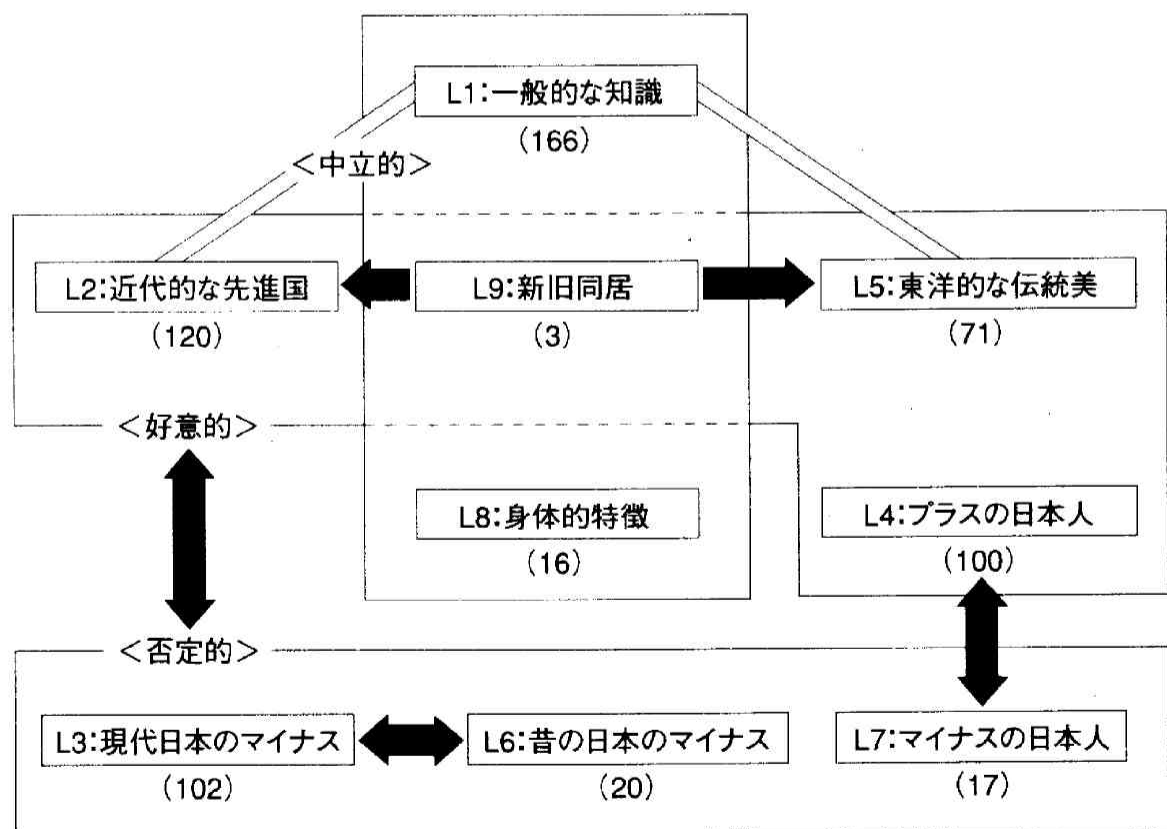
34の中グループは最終的に9つの大グループ（L）に分類された。大きい順に各グループに与えられたタイトルと頻度は次の通りである。

L1：日本に関する一般的な知識	166
L2：近代的な先進国のイメージ	120
L3：現代日本のマイナスのイメージ	102
L4：日本人のプラスのイメージ	100
L5：東洋的な伝統美のイメージ	71
L6：昔の日本のマイナスのイメージ	20
L7：日本人のマイナスのイメージ	17
L8：日本人の身体的特徴	16
L9：新旧同居のイメージ	3

これら9つのグループは大まかに次の3つのカテゴリーに分けることができる。まずL2、L4、L5は主に日本や日本人に関する「プラス」のイメージを扱っている。それとは反対に「マイナス」のイメージを扱っているのがL3、L6とL7である。残りのL1、L8、L9は「中立的な」事実を扱ったカテゴリーである。各カテゴリーに含まれるグループ内の頻度を合計すると「プラス」が291（約47%）で最も高く、「マイナス」が139（約23%）「中立」が185（約30%）となり、イギリスの子どもは日本に対してかなり好意的な良いイメージを抱いていることがわかる。

次に、これら3つのカテゴリーそれぞれについて、性別、年齢、日本語学習の各変数による答え方の違いを調べたところ、男女差はほとんどみられなかった。年齢別では年上の生徒の方が日本に関する情報がより豊富で、良い面も悪い面も積極的に指摘する傾向があるが、例外として日本人の長

図1. イギリスの子どもが持つ日本のイメージに関する空間配置



これに続いて、この図の中の9つのグループについて各々を構成するすべての中および小グループの空間配置を行ったが、その図を紹介するのはここではスペースの関係で省略し、各グループの中に含まれるイメージの内容を明らかにしながら全体の要約を行うと次のようになる。

この調査に参加したイギリスの子どもたちは、日本に対して2つの対立するイメージを持っている。ひとつは「近代的」対「古風」という対立で、多くの生徒の回答がこれら二つのイメージが混じったものであったが、どちらかというと前者の方がイギリスの現代っ子には優勢なイメージのようである。もうひとつの対立は日本や日本人に対する「好意的」なイメージと「否定的」なイメージである。この調査に限っていえば、回答の約半分が何らかの良い点を指摘したもので、イギリスの子どもたちは日本に対してかなり友好的な態度を持っているといえる。特に日本語学習者は非学習者よりその傾向が強い。ということは、イギリスで実際に日本語を学習している生徒の数はかなり限られているので、サンプルの抽出方法によっては今回の調査ほど好意的な結果は出ないという可能性がある。

イギリスの子どもたちが思い描く日本の良いイメージは、ハイテク産業が盛んな近代的で高度に進歩した、経済的にも豊かな国であると同時に、歴史が古く、昔からのさまざまな伝統文化を大切にする、東洋的な美しさを持った国でもある。逆に悪いイメージの代表は、人や車がひしめく狭苦しい小さな国の中で、人々があくせくとした生活を送っている姿である。昔の日本に関する否定的な回答の中で第二次世界大戦に言及したものは2つのみで、戦争を体験した世代の一部のイギリス人の中にいまだに根強く残っている戦時中の日本のマイナスのイメージが、1970年代後半から80年代にかけて生まれたイギリスの子どもたちの間ではかなり払拭されてきていると言える。その一方で、日本を発展途上の貧しい国で、自転車やボー

トが交通手段であるという昔のイメージがあるが、この中には日本と他のアジアの国々を混同していると思われる回答もいくつか含まれている。

イギリスの子どもたちの回答の中で最大のグループを構成したのは、日本について彼らが知っているいろいろな分野の事柄を書き記したものである。このグループに属す回答は大きく3つに分類することができる。ひとつは子どもたちが学校で学習したと思われる日本の地理、気候などについての一般常識的なもので、これらは全体の約2割を占める。残り8割はほぼ半分ずつ現代の日本に関する物事、例えば、電気製品や自動車メーカー、マンガについて述べたものと、日本の食べ物や習慣、国技、建築物といった伝統的な日本に関する物事について記したものに分かれる。これら中立のカテゴリーに含まれる「昔」と「今」のイメージの頻度を、前述の好意的なカテゴリーのそれらに加えても、イギリスの子どもたちにとって日本はやはり近代的な側面のイメージが優勢なことがわかる。

この調査では日本という国について思いつくことを書くように指示されたが、回答の延べ総数615のうち約2割にあたる133が日本人に関するものであった。その大部分が好意的な内容で、3つの類型が見られる。最も優勢なのは企業戦士と呼ばれる有能でやり手のビジネスマンに代表される勤勉で知的なイメージである。2番目は日本の伝統を受け継ぐ教養と精神性をそなえた日本人で、3番目が人柄や性格の良さである。このような日本人の長所を最も多く指摘した集団は日本語を学習している16歳未満の女子である。その一方で、日本人に対する批判的な意見の数は少ないが、16歳以上の女子を中心に、「主体性がない」、「束縛されている」、「男性は性差別主義者」、「女性はみな主婦」といった回答があった。また、黒髪や身長の高さといった日本人の身体的特徴について言及した回答は非常に少ない。

IV-2. イギリスの子どもによる日本と日本人の評価

イギリスの子どもたちが日本という国と日本人についてそれぞれ8項目にわたり、5段階で評価した結果が表1に示してある。項目は平均値の高い順に並べてある。目盛りの5段階は否定的な1と2、肯定的な4と5をまとめることによって3段階に省略し、回答が最も集中しているカテゴリーが網掛けで強調してある。

表1からイギリスの子どもの日本に対する評価は「経済的に豊か」で「強い国」の2つの項目においては大多数の生徒の意見が一致しているが、「公平さ」と「自由」の項目は他と比較して平均値がかなり低く、回答も3の「どちらともいえない」に約半数が集中し、否定的なポイントである1/2を選んだ生徒も2割以上いる。イギリスの子どもたちが自分の言葉で書き

表1. イギリスの子どもが評価した日本・日本人

N=203					
日本	モード	平均値	1&2	3	4&5
1. 豊かさ	4	4.00	3.5%	19.2%	77.3%
2. 国力	4	3.80	7.4%	23.3%	69.3%
3. 清潔さ	3	3.60	12.9%	32.7%	54.5%
4. 平和	3	3.44	14.8%	37.4%	47.8%
5. 信頼性	3	3.44	10.9%	45.5%	43.5%
6. 治安の良さ	3	3.42	12.4%	43.6%	44.0%
7. 公平さ	3	3.10	21.8%	47.5%	30.6%
8. 自由	3	3.09	23.9%	45.8%	30.2%
日本人	モード	平均値	1&2	3	4&5
1. 勤勉	5	4.49	2.0%	8.4%	89.6%
2. 教養	5	4.41	1.5%	15.9%	82.6%
3. 知性	5	4.33	2.0%	11.0%	87.0%
4. 礼儀正しさ	5	4.25	2.0%	14.4%	83.6%
5. 親しみやすさ	4	3.91	6.0%	23.4%	70.7%
6. 誠実さ	4	3.65	5.4%	37.1%	57.4%
7. 思いやり	3	3.48	8.4%	44.6%	47.0%
8. 寛容	3	3.14	19.9%	45.8%	34.4%

た日本のイメージの中には、直接これらについて触れたものはなかったが、「日本人のマイナスのイメージ」の中に束縛されている、男性は性差別主義者といった回答が含まれていたことをすでに述べた。自発的な回答の数は少なかったが、表1からこのような見方をしているイギリスの子どもが実際にはもっと多くいることがわかる。

国についての評価と比較すると日本人に関する評価はモード、平均値、回答の分布状況ともに全体的に非常に好意的である。8項目中4項目においてモードが最高値の5を、平均値も4.00以上の高い数値を示し、生徒の回答も肯定的なポイントである4/5に8～9割が集中している。「寛容」の項目のみ3を選んだ生徒が最も多く、否定的な回答を選択した者も約2割いる。この項目の平均値と回答の分布状況は、国に関する項目のうち「公平さ」と「自由」のパターンに非常によく似ている。狭量であるということも、上記の点と関連があるのかもしれない。

各項目において3つの変数のうち平均値に統計学的な有意差が見られるかどうか分析したところ、性別による違いのある項目はひとつもなかった。年齢別では、「自由」と「勤勉」の2つの項目において最も低いレベルの有意差 ($p<0.05$) が認められ、いずれも年齢の高い生徒の平均値の方が高い。最も顕著な有意差が見られたのは日本語学習の変数で、国に関する8項目中4項目（「豊かさ」「清潔さ」「国力」「信頼性」）、人に関する8項目中6項目（「勤勉」「礼儀正しさ」「親しみやすさ」「知性」「思いやり」「誠実さ」）において有意差が認められた。いずれも日本語学習者の平均値の方が非学習者より高くなっている。最も高いレベルの有意差 ($****p<0.0001$) が認められたのは「礼儀正しさ」の項目で、学習者の平均値が4.54に対し、非学習者は3.98である。そのほか「豊かさ」「清潔さ」「誠実さ」の3項目における有意差も大きい ($***p<0.001$)。自由回答による日本のイメージについて日本語学習者の方がより友好的な回答をすることをすでに確認したが、

統計学的に見ても学習者と非学習者の間には明らかに態度の違いがあることが実証された。

IV-3. 日本の子どもが思い描くイギリスのイメージ

この調査に参加した日本の子どもは310名であるが、自由回答形式の質問に無回答だった生徒が27名いたので、分析の対象になったのは283名の回答である。その内訳は男子109名（38.5%）、女子174名（61.5%）、中学生103名（36.4%）、高校生180名（63.5%）で男女比、年齢比ともに2対3の割合で女子と高校生が多い集団となっている。

日本の子どもの自由回答によるイギリスのイメージのユニットは男子が106、女子が115で、男女合わせると合計154の異なるユニットが見つかった。男女ともに回答の頻度が高かった上位4つの答えのユニットは、順位に多少の違いはあるものの全く同じで、それらは男女合わせると1位がさまざまな「観光名所」の名称、2位が「歴史が古く伝統がある」、3位が金髪や青い目などの白人の「身体的特徴」、4位が「皇室」の人物名であった。ところが、男女別に5位以下10位までのユニットを比較すると、重複するものはひとつもないことがわかった。男子の場合は「スポーツ」と「ロック音楽」に代表されるポップカルチャーや、イギリスの「地理・気候」に関する事実を述べたものが多いのに対し、女子の回答は「美しい・自由・楽しい・かっこいい・のどか」といった形容詞で印象を表したもののばかりが上位を占めた。

合計154のユニットはKJ法でまず70の小グループ（S）に分類された。上位4番目までの小グループは上記の最も回答の頻度が高かった4つのユニットと一致し、5位以下10位までは「S5：地理」、「S6：気候」、「S7：のどかな田園風景」、「S8：上品で紳士的なイギリス人」、「S9：スポーツ」、「S10a：美しい国」、「S10b：おしゃれで素敵でイギリス人」の順で続く。

この調査に参加した日本の子どもは年齢的に高校生の方が多いため、上位10位までのほとんどのユニットにおいて高校生の回答の頻度の方が高いが、3位の「身体的特徴」については例外的に中学生の頻度が高校生のそれを3倍以上上回っている。

次に、70の小グループが39の中グループ（M）に分類されると、小グループの主なトピックはそのほとんどが中グループに引き継がれた。上位10位までの中グループの特徴は、好意的なイメージと、一般常識的な事実を述べたもの、それとイギリス人について言及したものが多いということである。

これら39の中グループから最終的に10の大グループ（L）が生まれた。大きい順に各グループに与えられたタイトルと頻度は以下の通りである。

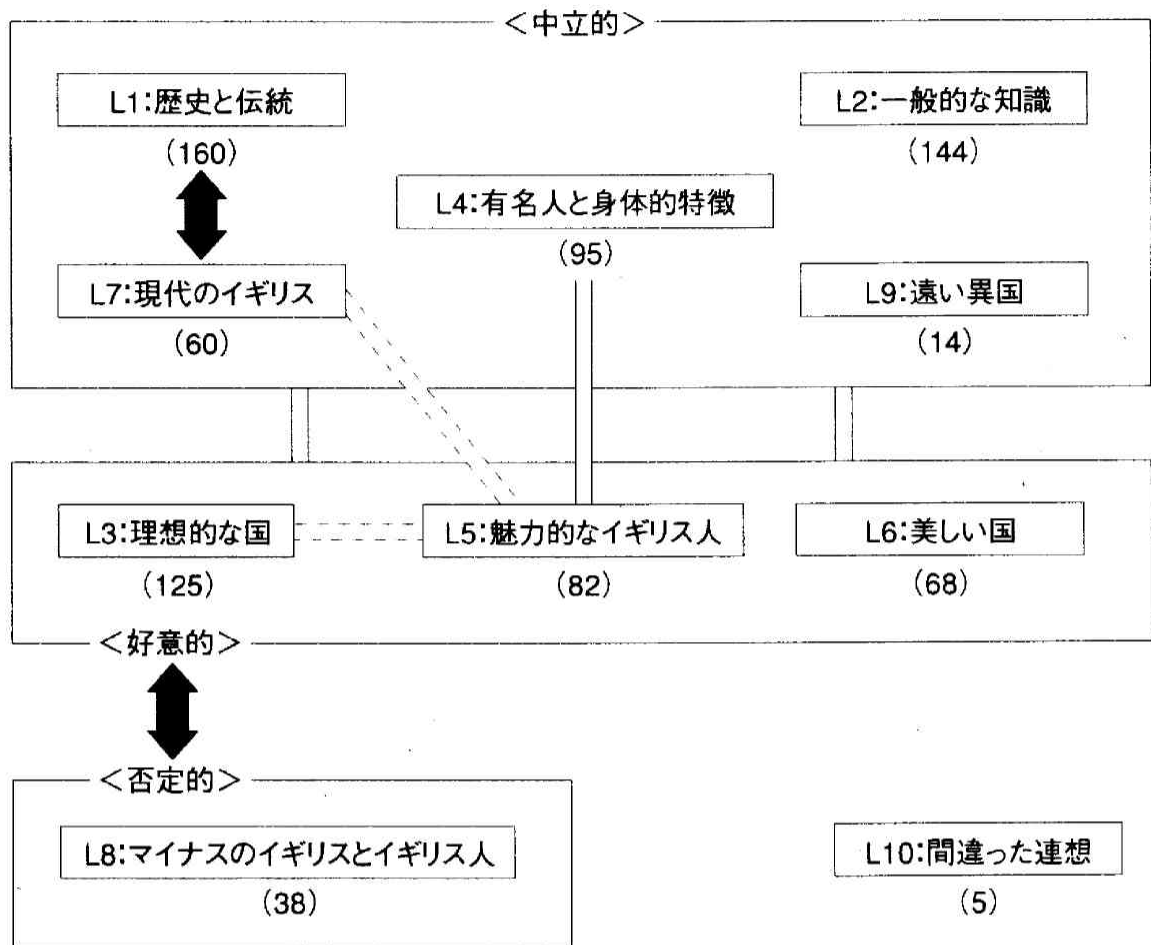
L1：歴史と伝統の国のイメージ	160
L2：イギリスに関する一般的な知識	144
L3：理想的な国のイメージ	125
L4：有名なイギリス人と身体的特徴	95
L5：魅力的なイギリス人	82
L6：美しい国のイメージ	68
L7：現代のイギリスのイメージ	60
L8：イギリスとイギリス人のマイナスのイメージ	38
L9：遠い異国のイメージ	14
L10：間違った連想	5

以上10の大グループはまず「プラス」のイメージを扱ったカテゴリー（L3, L5, L6）と、知識や事実を述べた「中立的」なもの（L1, L2, L4, L7, L9）に大別することができる。L8は唯一「マイナス」のイメージで、

L10はこれらの枠外に置かれる。これら10のグループに含まれるすべての回答の延べ総数は791で、そのうち「中立」に属す回答が約60%、「プラス」が約35%、「マイナス」が約4%で、その他が1%という割合で、日本の子どもがイギリスについて連想するイメージの大部分が、国や人々に関する彼らの知識と結びついていることがわかる。それと同時に、彼らはイギリスに対して憧れの気持ちにも似たかなり好意的な良いイメージを抱いていることも事実である。また国のイメージに占めるイギリス人の割合が高いのも特徴で、L4とL5という比較的大きな2つの独立したグループがイギリス人に関するもので、L8の一部もマイナス面ではあるが人についてのトピックを扱っている。これら3つのグループに含まれる人に関する回答の総数は195で、全体の約4分の1がイギリス人について述べたものということになる。その中で日本の子どもの多くがイギリス人の身体的特徴について述べているが、彼らが思い描くのは典型的な白人系のイギリス人像である。

次に、大グループの回答の頻度を性別、年齢別の人数のアンバランスを考慮しながら分析してみると、グループ編成の初期の段階ですでに現れていた特徴が更に顕著になった。まず、男子の回答は「事実」を述べたもの、女子は「印象的」なものが多いという傾向についてすでに触れたが、男子の場合「L2：一般的な知識」と「L7：現代のイギリス」の頻度の高さとして表れ、女子の回答の頻度は「L3：理想的な国」、「L5：魅力的なイギリス人」および「L6：美しい国」に圧倒的に集中している。年齢別に見ると、高校生の回答が多いのは「L1：歴史と伝統」と「L2：一般的な知識」であるのに対し、中学生の場合はL4の中の「身体的特徴」と「L5：魅力的なイギリス人」の頻度が比較的高い。このように高校生の描くイギリスのイメージは国に関するさまざまな知識に支えられているのに対し、中学生の場合は人についての観察可能な特徴の占める割合が高く、視覚的な要素が強いことがわかる。

図2. 日本の子どもが持つイギリスのイメージに関する空間配置



日本の子どもたちが思い描くイギリスのイメージに関する10の大グループを空間配置すると図2のようになる。

これら10のグループについてもそれぞれを構成するすべての中・小グループの空間配置が行われたが図は省略し、それを基に日本の子どもたちが思い描くイギリスのイメージを全体的に要約しながらまとめると次のようになる。

日本の子どもたちはイギリスの実にさまざまなジャンルー地理・気候・歴史・政治・経済から文化・生活様式までーに関する情報と知識を持っている。そして、イギリスのイメージとしてそういった事実を単に書き記す

傾向がある。

イギリスは「伝統的」な側面と「近代的」な側面を併せ持った国であると日本の子どもたちは認識しているが、イギリスは彼らにとって圧倒的に「伝統と歴史の国」である。そのイメージは観光用パンフレットの、ロンドンの有名な観光スポット、例えばバッキンガム宮殿や大英博物館などと直結しているようである。そのほかにも文化遺産としての古い立派な建築物や、スコットランドのバグパイプやタータンチェックなど伝統文化に関するものがこのイメージの核を成している。また、シルクハットと傘、石畳の道を走る馬車といった古風なイメージもこの中に含まれる。これに対し、「近代的」なイギリスのイメージの代表は日本の子どもたちにも人気のあるサッカーを中心としたスポーツとロック音楽である。その他、それほど数は多くないが、イギリスが多民族社会であること、女性の地位が高いことなどに言及した生徒もいる。

日本の子どものイギリスに関するイメージの中で特徴的なのは、イギリス人に関する中立的な回答が多いことである。イギリスの子どもの場合、有名な日本人の名前を挙げた者は皆無であるが、日本の子どもは皇室のメンバーを中心に具体的な人物名を答えたものが目立つ。更に身体的な特徴について述べた回答が多いのもイギリスの子どもの対照的である。

このようなイギリス人に対する中立的なイメージのほかに、日本の子どもは非常に「好意的なイギリス人像」も持っている。それは礼儀正しく、上品で紳士的な態度と、かっこよくておしゃれな外見の良さ、それに親切で心が広いなどの性格の良さを兼ね備えた魅力的なイメージである。その一方で、イギリス人は冷たくて厳格といったマイナスの見方も少しある。

このように、日本の子どもたちはイギリス人を好意的に見ているばかりでなく、イギリスという国に対しても非常に良い2つのイメージを抱いている。ひとつは、のどかな田園風景と美しい町並みのある「環境的に美し

い憧れの国」というイメージである。もうひとつは、いろいろな意味で「理想的かつ望ましい国」というイメージで、こちらの方が回答の頻度が高く日本の子どもにとってより重要なテーマである。具体的にはイギリスは自由な国で、暖かい人間関係があり、ゆったりとしたペースの贅沢な生活を楽しんでいるといった回答がこのイメージを代表する。「自由」という言葉を用いたのは特に女子に多く、これは日本の社会ではさまざまな制約から、彼女たちが自分の思い通りに行動できないという現実があるため、日本の女の子たちの目にはイギリスが自己実現のできる理想的な国であると思えるのかもしれない。また、日本では人と人とのつながりが希薄になりつつあり、ゆとりのある生活の実現もなかなか難しく、このように現代の日本にないもの、または失われつつあるものを理想化してイギリスのイメージに投影させているようである。逆に、否定的な国のイメージとして書かれた回答はほんの僅かで、失業率の高さなど社会問題に触れたものと、混雑しているというイメージだけである。

中立的なカテゴリーの中にもうひとつ「遠い異国のイメージ」が入っている。これはまさに遠い外国、言葉や習慣が違う国というように、距離的な遠さや日本との違いを強調した回答である。このカテゴリーは日本の子どもに特有で、イギリスの子どもには見られなかった。

最後に、唯一どのカテゴリーにも属せずに独立しているのが、「間違った連想」である。これにはルイ16世などイギリスと他のヨーロッパの国々を混同した回答が含まれているが、このような回答は非常に少ない。

IV-4. 日本の子どもによるイギリスとイギリス人の評価

表2は日本の子どもたちがイギリスとイギリス人について表1と同じ項目で評価した結果を、平均値の高い順に示している。

表2上部のイギリスに対する日本の子どもたちの評価は、最も回答が集

表2. 日本の子どもが評価したイギリス・イギリス人

N=310					
イギリス	モード	平均値	1&2	3	4&5
1. 清潔さ	4	3.81	8.1%	30.3%	61.6%
2. 自由	3	3.61	13.6%	33.7%	52.8%
3. 国力	3	3.49	10.0%	44.8%	45.1%
4. 豊かさ	4	3.47	9.7%	40.0%	50.4%
5. 平和	3	3.36	18.7%	40.3%	40.6%
6. 信頼性	3	3.36	12.0%	48.4%	39.7%
7. 公平さ	3	3.26	18.3%	45.9%	35.8%
8. 治安の良さ	3	3.11	26.8%	41.6%	31.7%
イギリス人	モード	平均値	1&2	3	4&5
1. 礼儀正しさ	3	3.75	9.7%	32.3%	58.1%
2. 教養	3	3.62	9.7%	39.2%	51.1%
3. 寛容	3	3.59	9.4%	37.7%	52.8%
4a. 誠実さ	3	3.35	9.7%	53.4%	36.9%
4b. 知性	3	3.35	9.7%	53.4%	36.9%
6a. 親しみやすさ	3	3.26	19.1%	42.4%	38.5%
6b. 思いやり	3	3.26	18.7%	41.7%	39.5%
8. 勤勉	3	3.09	22.3%	50.3%	27.4%

中していることを示す網掛けが肯定的なポイントである4/5になっているものが8項目中5つあることから、概して好意的であることがわかる。しかし、過半数の生徒が肯定的な評価をしているのは「清潔さ」「自由」「豊かさ」の3項目のみである。これらは彼らが自分の言葉で表現したイギリスのイメージの中の「美しい国」と「理想的な国」に含まれていたユニットと一致する。それ以外の項目では3の「どちらともいえない」を選んだ生徒の割合が4割以上と高くなっている。上位4位までの項目を表1と比較すると、イギリスと日本の子どもたちの多くが相手の国をお互いに「清潔で、豊かな、強い国」と認識していることがわかる。相違点はイギリスの子どもは日本を「平和な国」と見ているのに対し、日本の子どもはイギリスを「自由な国」とみなしている点である。

表2下部のイギリス人についての欄に目を転じると、モードがすべて3、網掛けの部分も8項目中5つにおいて中央の3に集中していることから、「礼儀正しさ」「教養」「寛容」の3項目以外は、あまり好意的な評価をしていないことがわかる。特に表2の下から3つの項目「親しみやすさ」「思いやり」「勤勉」においては、約2割の生徒が否定的なポイントの1/2を選んでいる。平均値も最高3.75、最低3.09と国の評価における平均値（最高3.81、最低3.11）よりも上限・下限ともにやや低く、国よりも人に対する評価の方がやや否定的である。これは表1で見たイギリスの子どもたちの回答のパターンとはかなり違っている。イギリスの子どもの日本および日本人に対する評価は、日本の子どもに比べて明らかにより好意的で、国と人とは人の評価の方が圧倒的に好意的である。

次に、性別・年齢別に平均値の有意差を調べて見ると、国に関しては男女差のある項目はひとつもなかった。年齢別で有意差の認められたのは「豊かさ」(* $p < 0.05$)と「国力」(** $p < 0.01$)の2項目で、どちらの場合も平均値が高いのは中学生で、彼らの方が高校生よりイギリスをより豊かでより強い国であると見ている。

イギリス人に関する評価では、性別と年齢の両方において有意差が認められた。まず男女差が見られたのは「親しみやすさ」(** $p < 0.001$)と「寛容」(** $p < 0.01$)の各項目で、どちらも女子の平均値の方が高く、これらの項目において男子よりイギリス人をより好意的に評価している。特に「親しみやすさ」の項目では男子の平均値は3.0以下(2.98)であり、明らかに否定的な見方をしていることがわかる。有意差も大きい。年齢別では「勤勉」(* $p < 0.05$)と「思いやり」(** $p < 0.01$)の2つにおいて、中学生の方がより好意的な態度を示している。「勤勉」の項目では高校生の平均値は3.0を下回って2.99である。

このように日本の子どもの場合、年齢による違いの方が性別よりも顕著

で、中学生の方が高校生よりイギリス・イギリス人に対して友好的な態度を持っていることがわかる。男女別では男子の方が否定的な見方をする傾向がある。

IV-5. 日本とイギリスに関する情報源

この調査に参加したイギリスと日本の子どもたちは、お互いの国や人々についての情報をどこから得ているのだろうか。表3は彼らがそこから情報を得ていると答えた各種メディアについて、割合の高い順に並べたものである。

表3. 日本・イギリスに関する情報源

N = 230		N = 310	
イギリスの子どもの日本に関する情報源		日本の子どものイギリスに関する情報源	
1. 学校の授業	61.1%	1. 学校の授業	87.1%
2. 映画・ビデオ	37.9%	2. テレビ	33.9%
3. テレビ	36.5%	3. 新聞	27.1%
4. 新聞	22.2%	4. イギリスの物語	18.4%
5. 日本の物語	2.5%	5. 映画・ビデオ	14.8%

表3から日英両国の子どもたちにとって、学校が最も重要な相手国に関する知識の情報源であることがわかる。彼らはともに地理と歴史の授業でお互いの国について学習したと答えているが、日本の子どもはそのほかにも英語、社会、音楽を列挙している。日本の子どもの方が学校でイギリスについて学習する機会が多いようである。テレビと新聞に関しては、過去6ヶ月の間にお互いの国についてのニュースを見たり、読んだりしたかという質問に対して「はい」と答えた生徒の割合であるが、子どもたちにとってテレビの方が新聞より身近な情報源である。

イギリスと日本の子どもの情報源で大きな違いが見られるのは、映画・

ビデオと翻訳された物語である。イギリスの子どもは映画やビデオがテレビと同じくらい重要な情報源であるのに対し、日本の子どもにとっては日本語に翻訳されたイギリスの物語のほうが映画・ビデオより重要な情報源になっている。読んだ本の作者名として、シェークスピア、アガサ・クリスティーの名前が、読んだ本のタイトルでは『クリスマス・キャロル』、『不思議の国のアリス』、『秘密の花園』、『ドリトル先生』シリーズが挙げられた。これらの英米児童文学は19世紀中葉から20世紀初頭にかけて英国生まれの作家によって英国を舞台に書かれた古典で、ビクトリア朝からエドワード朝の雰囲気を持った作品群である (Egoff, 1988)。一方、イギリスの子どもで日本の物語を翻訳で読んだことがあると答えた生徒は203名中5人だけで、具体的な作者名、作品名は挙げられなかった。

V. 結論

以上の分析結果から日英両国の子どもたちは物理的、人種的、文化的に隔たった状況に置かれているにもかかわらず、学校での学習事項を主な情報源とした相手の国や人々に関するかなり広範な知識を持ち、彼らの目を通して見た日本とイギリスのイメージはマイナスのものよりも圧倒的にプラスのイメージの方が優勢であることがわかる。

イギリスの子どもたちはどちらかというと現代の日本のイメージを強調する傾向があるが、それは彼らの身近にさまざまな日本製品があることや、イギリスでも人気のある日本のアニメやマンガが視聴覚メディアを通して受容されていることと関係があると言えそうだ。一方、日本の子どもたちにとってイギリスは伝統の国というイメージが強いのは、イギリスは日本人観光客に人気のある国のひとつで有名な観光スポットのほとんどが歴史的な建築物であることや、子どもたちによく読まれているイギリスを舞台

とした物語の多くが20世紀初頭以前に書かれた古典であることなどが伝統的なイメージの形成に関与しているようである。

またイギリスの子どもたちは自分の言葉で表現した日本のイメージと、日本・日本人に対する評価が一貫して好意的であるのに対し、日本の子どもは特に女子を中心にイギリスを理想郷的なイメージで捉え、好意的に表現する子どもも多いが、全体的には中立的な事実や観察可能な事柄を述べる傾向がある。現代の日本の子どもたちのイギリス・イギリス人に対する態度は概して好意的で、LambertとKlineberg (1967) が結論付けたほど非友好的なものではなくなっているが、イギリスの子どもたちほど友好的ではないのも事実である。更に、日本の子どもは日本とイギリスの違いや、日本人とは異なる身体的特徴を強調するのも特徴である。これに関してはLambertとKlineberg (1967) の研究で明らかにされた日本の子どもの特殊性が現代の子どもたちにも受け継がれていることを示す。

イギリスの子どもが多くが日本人に対して抱いている勤勉で知的なイメージは、日本人ビジネスマンのステレオタイプである。日本人の中では男性の方がメディア等に登場することが多く、これはEaglyとKite (1987) が述べているように、イギリスの子どもたちが日本人のイメージとして優勢な下位集団に対する固定概念を当てはめている例であると言える。

この調査で相手の国や人々に対する態度の違いを最も顕著に示すのは、年齢や性別ではなく、イギリスの子どもにのみ適用された語学学習の変数であることがわかった。つまり、よく言われるように、外国語を学習してその国の文化背景などについて理解を深めることが、その言語が話されている国や人々に対するイメージや意識の向上につながるということである。しかし、この調査において日本の子どもは全員英語学習者ということになるが、イギリスの子どもほど態度が好意的でないのは、ひとつにはイギリスの日本語学習者はGCSE (中学校相当レベル)、Aレベル (高等学校相当

レベル) ともに日本語は選択科目で希望者のみが学習するのに対し、日本の場合は外国語教育といえば実質的に英語のみで他の言語を選択できる余地がないのが実情で、生徒の希望にかかわらず英語を学習せざるを得ないという現実が考えられる。そこで、日本の子どもたちにも語学学習による意識の違いが見られるかどうかを調べるためには、例えば、英語科が設置されているような学校で英語科と普通科の生徒を対象にした調査を行うことが考えられる。

最後に、この調査はイギリスと日本の多くの子どもたちの協力なしには実施することができなかったであろう。彼らひとりひとりがアンケートに答えるために割いてくれた時間と、豊かな想像力と、熱意に心から感謝している。

参考文献

- Brigham, J. C. (1971). Ethnic stereotypes. Psychological Bulletin, 76 (1), 15-38.
- Church, J. (ed.) (1994). Social Trends 24. London: HMSO.
- Eagly, A. H. and Kite, M. E. (1987). Are stereotypes of nationality applied to both women and men? Journal of Personality and Social Psychology, 53 (3), 451-462.
- Egoff, S. A. (1988). Worlds Within: Children's Fantasy from the Middle Ages to Today. American Library Association.
- Fothergill, S. and Vincent, J. (1985). The State of the Nation. London: Pan Books.
- Furnham, A. and Gunter, B. (1989). : The Anatomy of Adolescence: Young People's Social Attitudes in Britain. London: Routledge.

- Gudykunst, W. B. and Nishida, T. (1994). Bridging Japanese/ North American Differences. London: Sage.
- International Society for Educational Information (ed.) (1989). The Japan of Today. Tokyo: International Society for Educational Information.
- Japan Information and Cultural Centre (ed.) (1991). Inside Japan. London: Embassy of Japan, Japan Information and Cultural Centre.
- Jowell, R., Curtice, J., Park, A., Brook, L. and Ahrendt, D. (eds) (1995). British Social Attitudes: The 12th Report. Aldershot: Dartmouth.
- 国土交通省編 (2003)、『平成15年度版観光白書』、東京：独立行政法人国立印刷局。
- Lambert, W. E. and Klineberg, O. (1967). Children's Views of Foreign Peoples: A Cross-National Study. New York: Meredith, Appleton-Century Crofts.
- Lippmann, W. (1922). Public Opinion. New York: Harcourt Brace.
- Piaget, J. and Weil, A. (1951). The development in child of the idea of the homeland and of relations with other countries. International Social Science Bulletin. 2 (4), 467-478.
- Rose, P. (ed.) (1993). Social Trends 23. London: HMSO.
- 総務庁青年対策本部 (1993)、『世界の青年との比較からみた日本の青年：第5回世界青年意識調査報告書』、東京：大蔵省印刷局。
- 総務庁青年対策本部 (1994)、『青少年白書：青少年問題の現状と対策』、東京：大蔵省印刷局。
- 総務省統計局・統計研究所編 (2001)、『第51回日本統計年鑑：平成14年度版』、東京：日本統計協会・毎日新聞社。
- Stephan, W. G. and Rosenfield, D. (1982). Racial and ethnic stereotypes. In A. G. Miller (ed.) In the Eye of the Beholder: Contemporary Issues in Stereotyping. New York: Praeger.
- Sumner, W. G. (1906). Folkways. New York: Ginn.